目次

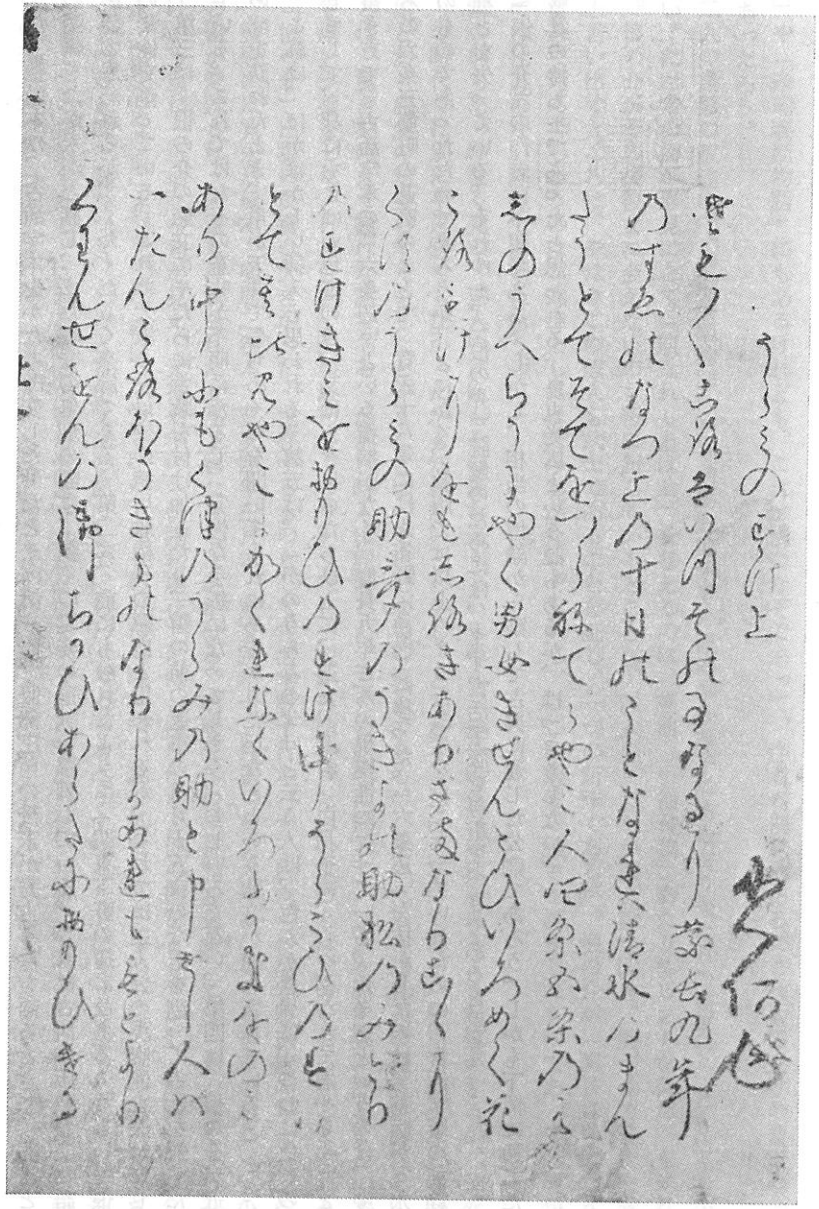
凡例……三
解説……五
うらみのすけ　上……一三
うらみのすけ　下……四七
仮名草子年表……八二

解説

日本の近世は、織田信長が入京して、室町幕府の将軍足利義昭を追放した時（一五七三年）から、徳川の江戸幕府崩壊（一八六七年）までの約三百年を称しているが、その近世の初頭で注目される現象に、本の印刷が始まったということがあった。すなわち豊臣秀吉の第一回の朝鮮侵入（一五九二年）の分捕品の中に、朝鮮の銅活字や印刷器具があり、秀吉はそれらを宮廷に献じたので、宮廷はそれを使ってはじめて「古文孝経」の印刷をおこなった（一五九三年）のである。その後四年経って（一五九七年）、後陽成天皇の命で新しく大型の木活字を作り、「錦繡段」その他を、またさらにその六年後（慶長八年・一六〇三年）には「五妃曲」その他を印刷している。以上を慶長勅版と呼び、すべて漢文の本で、この事実は印刷にも当った西洞院時慶（ときよし）の「時慶卿記」の記録にくわしい。

当時は、印刷は日本より朝鮮の方が進んでいた。朝鮮では京城の李朝が印刷に熱心で、太宗恭定王のとき、鋳字所を設け、数十万の銅活字を鋳造したという（一四〇三年）。実にヨーロッパのグーテンベルクの鉛活字発明（一四四五年）に先立つこと四十二年である。しかしこの活字はすべて漢字である。この活字が日本にもたらされ、慶長勅版の印刷事業が始まったわけだが、これに同調したのが徳川家康で、彼は秀吉歿後（慶長三年・一五九八年）伏見城の城主であったころ木活字を作り、元佶（げんきつ）という僧に托して「孔子家語」をはじめ自分の愛読書をつぎつぎに印刷させたばかりでなく、宮廷にも銅活字を作って献上したりしている。

こういう上流階級の印刷熱が刺戟を与えたのか、民間にも急に印刷熱が上昇した。たとえば五十川了庵は「太平記」（慶長七年・一六〇二年）を印刷しているが、これは漢籍ではなく和書であり、片仮名も木活字を使っている。仮名文字の開版としてはこれが最初ではないかと思われる。そのほか、秦宗巴が「徒然草寿命院抄」を（慶長九年）、寺院の要法寺が「沙石集」を（慶長十年）というふうに、漢籍と並んで和書の翻刻も盛んになって来たが、本格的に日本古典と取り組み、仮名文字を活字にして古典の普及啓蒙につとめたのが、角倉素庵（すみのくら）・本阿弥光悦のいわゆる嵯峨本であった。これは素庵の別荘が嵯峨野にあったためにそう呼称されたのであるが、板下（はんした）を光悦が書き活字印刷として「伊勢物語」



古活字本　上　巻頭

一　慶長九年（一六〇四）六月十日。
二　清水寺の万灯会。清水寺は京都東山にあり、千手観音を本尊とする。
三　大勢ぞろぞろ。
四　謡曲「熊野」の文句。「四条五条の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖をつらねてゆく末の」
五　はなやかな着物を着て。
六　「葛の裏葉」と「恨み」とをかけた。恨みは恋の恨みの意。以下仮空の人物。
七　謡曲「恋重荷」に「中空になすな恋、恋には人の死なぬものかは」とある。
八　特に恋をかたる相手もなく、さびしく思っている者。
九　神仏が衆生を救うために立てられた誓願。
一〇　あらかた。霊験いちじるしいこと。

うらみのすけ　上

そも〳〵ころはいつぞの事なるに、[一]慶長九年のすゑのなつ上の十日のことなれば、[二]清水のまんだうとて[三]そでをつらねてみやこ人、[四]四条五条のはしのうへ、らうにやく男女きせんとひ、[五]いろめく花ごろも、げに(お)をもしろきありさまなり。

こゝに[六]くずのうらみの助、夢のうきよの助、松のみどりのすけ、きみをおもひのすけ、[七]中ぞらこひのすけとて、其比みやこに(かくれもなく)かくれなくいろふかきをのこあり。中にもくづ(ず)のうらみの助と申せし人は、[八]一だんこゝろほそきものなりしが、これももとよりくわんぜをんの[九]御ちかひ、[一〇]あら